

おわりに

本校では、平成12年度から3年間にわたる研究の成果として、教育課程を支援領域という視点から見直し、本校としての教育課程を編成するに至りました。その教育課程は、他の養護学校のそれと比べると独自の用語を使用しているため、初めて接する方々には若干わかりにくい点もありますが、児童生徒にとっては有効なものとなっていると自負しております。そして、平成15年度からの2年間では、障害のある子どもたちには一生涯にわたる支援が必要であり、そのときどきの移行期での支援はいかにあるべきかとして、支援システムを確立し、個別の教育支援計画をまとめ日々の教育実践を行っているところです。

これらの、ここ数年間の研究成果である「教育課程」や「個別の教育支援計画」が整ったということは、言ってみれば山登りをするときの道しるべが立てられ、登山計画の様式や地図が整ったようなものです。今後はそれらをうまく活用して子どもたちの人生という名の登山をアシストしなければこれまでの研究の成果は無駄になってしまいます。つまり、支援領域という視点から編成した教育課程を頼りに、保護者とともに個別の教育支援計画という登山計画を策定し、その計画を基に個に応じた教育的支援というアシストを実践するわけです。その結果、児童生徒は、人生のひとつの通過地点である山に登頂し、次の通過地点に向けてまた登り始めるのだと思います。そこで、私たちが次の課題としてやらなければならないことは何かと言えば、その計画をより効果的に活用するためにはいかにあるべきかという、実践の中での検証を行うところに行き着いたわけです。

そこで今回は、平成17年度から2か年の研究として「一人一人の子どもを輝かせる個別の教育支援計画とその実践」というテーマで研究することにし、個別の教育支援計画を活用した教育的支援について更なる検証をして参りました。小学部では、個別の教育支援計画を活かした授業を行うためにはいかにあるべきか、研究授業と授業研究会を繰り返し検証して参りました。中学部では、集団学習の中で生徒が主体的に活動できる授業作りを目指して、「わかる授業」を合い言葉に研究を進めて参りました。そして、高等部では個別移行支援計画の卒業時はもちろん、在校時の有効な活用法を関係機関と連携を図りながら日々の授業の中で検証して参りました。

申すまでもなく、私たちの行っている指導とか支援というものには決定版のようなものはなく、日々変化していくものだと思います。ですから、今回の研究も今後テーマとして取り上げるかどうかはまだわかりませんが、更に検証を加えていくことは間違いありません。そのためにも、皆様に発表することで御批判や御助言を頂き、今後進むべき道のヒントを得たいと思いますので、多くの御意見をお寄せくださいますようお願いいたします。

おわりに、共同研究者として多くの御支援をくださった先生方に心からの感謝を申し上げ、むすびのことばといたします。本当にありがとうございました。

副校長 江連 良治